

永井荷風と高橋康雄氏

清水 隆

この一見奇妙な表題は、筆者の可成強引な「こじつけ」と映るかも知れないが、偶々來年度の比較文學論の講義の準備のために、荷風の「斷腸亭日乗」を読み返して居る時に、荷風の生涯と高橋氏のそれとの類似點が頭を過つた所爲で、勿論、氏との交遊は僅か三年半程であり、従つて氏の生涯を熟知して居る譯でもないけれど、荷風が過した放蕩の日々の主な対象であつた女性と言うものを、突拍子も無いとの批判は覺悟の上で、執筆活動と文化學部運営上の雜務とに置き換えて見ると、不思議な共通點が存在することに氣づいたため、以下は氏の追悼を兼ねた全くの私見であることをお斷わりして置く。

この三年餘りの間に、高橋氏から贈られた著書は「乱歩」「我輩は猫である」・「伝」「斷髮する女たち」「風景の弁証法」の四冊で、三拾年を超える研究生生活で四冊の學術書しか著わして居ない怠愼な筆者の眼から見れば、その著作への耽溺（？）振りには、將に驚異的としか形容しようがない。加えて、學部の中核をなす文化研究コンセプトづくりや文化學會の創設運営、更には、北方文化フォーラムの推進や學内での幾多の研究會の設立等々、枚擧に遑がない程ののめり込み振りは、丁度昭和拾年代に荷風が連日女性宅を

精力的に訪れて放蕩に耽って居た一途な姿を不圖連想させたのである。「孤高の人」永井荷風が、あらゆる面で何かと統制が厳しくなった戦前の世相の下で、意識して繰り返したと見られる反社会的な行動と、高橋氏のそれとを直線的に結びつける譯ではないが、可成の期間 *free writer* としての厳しい生活を送られた氏にとって、すべての面での骨身を削る様な *hard work* の日々に、恐らく氏自身も意識せずに形成された良く言えば律儀さ、見方を換えれば、何事も見て見ぬ振りの出来ない脆さから生ずる執筆や雑務への否應なしの傾斜も、ひよっとすると氏も「孤獨の人」であったからなのではあるまいか。我々同僚や學生達への暖かな奉仕振りは、將に戦後の荷風の浅草の踊り子達への献身的な迄のそれと重なり合う様な氣がしてならない。荷風の孤獨な死に對して、三島由紀夫が評した「野垂れ死にする文學的ダンディズム」と言う抽象的な言葉よりは、堀口大學の「温情と義理堅さの人」と言う表現こそ、將に、高橋康雄氏に捧げるのに相應しいのではないだろうか。妄言を多謝して、氏の御冥福を祈念する次第である。

散りてのち おもかげに立つ 牡丹かな

(平成拾二年拾二月二拾六日)